
予防医療における自覚症状を伴う乳がんの検診受療行動化と検診意識の検討

後山 尚久、 藤原 祥子、 堤 英雄
(大阪医科大学健康科学クリニック)

【目的】:

わが国の乳がん検診率は2009年度より開始された全額公費負担により徐々に上昇しているが、欧米先進諸国に比べてはるかに低い。“しこり”の自覚症状を携えて医療機関を受診する症例が少なくないのが現状である。

今回予防医療現場における女性乳がん検診意識および症状自覚と検診受療行動との関連性を検討し、乳がん検診の意味を考察した。

【対象と方法】:

当院で過去4年に実施した任意型、対策型乳がん検診20,304件中乳がんと診断された82例を対象として症状自覚の有無と臨床像の検討を行った。また2011年度の対策型乳がん検診受診者2,658名の乳がん検診への健康意識を自己記入方式で調査した。

【結果】:

82例の乳がん(がん発見率:0.40%)のうち、検診時自覚症状があった比率は31.7%(26/82)であり、それ以外に自己触診でしこりが自覚できたと思われる比率は11.0%(9/82)であった。61.4%は毎年乳がんの検診が適当と考えているが、実際の毎年受診は23.3%であり、大きな隔たりが観察された。これまで、乳がん検診を受けなかった理由の73.6%が「きっかけがない、なんとなく」であり、27.6%は「症状がないから」であった。

【結論】:

昨今わが国の乳がんの罹患率は増加の一途を辿っている。本疫学研究で明らかな乳腺腫瘍の自覚がありながら乳腺専門診療科を受診せず、本来無症状者の健康をチェックする人間ドックやがん検診に足を運ぶ比率が高いことと自己触診の習慣があれば気付いた可能性がある乳がんも少なくないことがわかった。意識調査では、予防医学と疾病医学の役割や医療形態の違いへの誤認や健康生成への意識の希薄さが推察された。現状の人間ドックや乳がん検診の存在そのものががん発見率の上昇、死亡率の低下へ貢献していることが推察されるが、乳がん死撲滅のためにはがん検診への意識改革の必要性が重要と思われた。